

転換期の思想と文学

中世文学考察への序章

一般的な意味に於いては、歴史はいつの時にも変わりつつある。
最近の新聞報道で、

一九七六年九月、毛沢東主席の死去により建国以来未曾有の転換期を迎えた中国は、約五年間の試行錯誤を経て、七八年末の三中全会、そして今回の六中全会を経て転換期終結を宣言、「四つの近代化」を中心とした新路線の本格的展開を目指すこととなった。
(毎日新聞・一九八一年六月三十日)

というような文章が見受けられる。中国が過去五年ばかりの時期に、極めて重大な転換期を経過したことは明らかな事実である。このような意味の転換期は、日本史の展開でも、いろいろな意味で存在したことが考えられるし、個人の生活の上になって存在することが認められてよい。

私がここに転換期の思想と文学というような主題を提出したのは、

原 田 芳 起

右の例に示したようなある国家なり団体なりの体制の路線の転換の経過を示す時期などを指す命名ではなくて、もちろん文学史の研究に関連して、主として広義の中世と認めてよきような過渡期的な時代の社会と他人との間のさまざまな現象の上に限定してのことである。

私たちの最も近い体験から考えれば、昭和二十年を境目にしての戦後は、確かにあらゆる面に於いて百八十度に近い転換を強いられた時期であった。しかし、明治以後の日本の近代の歩みを完全に停止せしめ、崩壊せしめて、新しい時代がその萌芽から徐々に形成せられたと言い切れるか。あるいは、近代日本の発展途上に於ける、戦前と戦後との転換の時期であったと見なすが、実際により近いものではなかったか。日本及び日本人は、戦前の長い間に、極めて重大な過ちを犯して来たことは否定できない。極めて長い期間にわた

って、幾度も試行錯誤を繰返して来た。私たちの中に、正しい世界認識が欠けていたと反省せざるを得ないし、日本人自体の現実生活に対する判断の中にも前近代的な歪みが残存していたことも否定し得ない。私のように貧しい農村で人と成ったものが、農村の戦前と戦後とを比較して眺める時、まさに、古い時代が終焉を告げて新しい時代がようやくにして到来したという感慨を深くせざるを得ない。その古い時代相に根強く残っていたのは、前近代的要素であったと認めざるを得ない。私も当時の高等小学校を卒えた十五歳から二年ばかりの間農業労働に従事したが、農作業は専ら肉体労働であったし、いわゆる小作農が大部分を占める農村生活は極度に貧しかったのを体験的に知っていた。そうした貧窮の中から、限界に抗して向上の道を求めていたことは確かであった。日本の国家が急ピッチに近代化路線をつっぱしって来た中で、後まわしにされ、無視されて来た部面が多々あって、その中に日本国民の大多数を占めて、国家の基底をなしていた農村社会があったわけである。

そうした中で終戦を迎え、他力で農地改革が実施されたことによつて、農村もその出身者たる私などにもわが眼を疑うばかりの変貌を遂げた。私はこの変貌を見ていると、外国軍隊の占領下という異常事態の中での強制によるという胸につかえる物があるとはいへ、来るべきものが来たと思つた。戦前から戦中・戦後を通じて、たゞならぬ時期に日本及び日本国民が当面しており、それがますますエスカレートして来て、これが解決するか、さもなくば破滅に至るかという、深刻な危機感を抱き続けて来たことを否定し得ない。幾度

か国民全般を恐怖と不安とおとしめるような国家的な事件ないしは事変が起こったし、国民の誰しもがとつきには判断がつかず、度を失つてしまうような事態を経験した。決して明るい世の中ではなかった。ある意味では、この半世紀は、かの日本史の中の中世と称せられている鎌倉・室町期の状態に似て来ていたのではないかと考えさせられることがあった。

かの昭和二十年の終戦を転機とした現代史の中の転換期は、潰滅的な敗戦という徹底的打撃によつて解決への端緒を見出したもの。戦争という事態を避けるべき努力はあれこれとなされたはずであるが、勝利の可能性のほとんど考えられないような戦争に突入してしまった。その時代の趨勢に制御をかけられなかったことが悔やまれる。転換への契機は敗戦という事態にあり、終戦を以つて時の流れを区切つて、それからの若干の期間、たとえば昭和二十年代を名づける△転換期▽と見なすことは、多分認められるであろう。

しかし、昭和二十年八月を境界としてわれわれの国民生活の上に生起した大転換・大変革は、言うならば外から強制的に与えられたものであった。新憲法の制定、それによつて定められた戦争のためのあらゆる軍備の放棄を始めとして、政治・教育・文化等の諸方面に対する民主化路線は、必ずしも国民の内部から推進されたものではなかった。外国軍隊の占領下に於いて、有無を言わさぬ強制の下で、一見無抵抗に追隨しているかに見えた。迎合的な動きも当然の事の如くにあらこちらに見受けられた。この現象は、いつの時代・いづこの民族の歴史にも見られる事で、風に靡く草木の如きもの

である。それはそれとしても、国民の戦争なき平和の希求、民主的社会の建設の願望は、これは決して外からの強権の締め付けによって押し付けられたものではなかった。敗戦に終った戦争体験が、国民の内面に残したものは、戦争への不安であり、恐怖であった。その恐怖の印象、国破れて山河のみ在る現実を凝視した国民が、戦争を否定し、憎悪する思想を強く持つに至ったのは、自然であり当然であつて、外からの強制によつてそう考えさせられたものではないのである。むしろ、嘗つて一億悉く砕け去つてもこの祖国を守り抜くかうというような、明らかに本来を取り違えた思考を強いた呪縛的思想から解放されたことによつて、おのづから民主主義的な思考の方向におもむいたと見るべきではないか。

とすると、昭和二十年八月を機として国民の思考の方向を、曾つては予想もされなかつたほどに大きく転廻せしめた力には、敗戦国として外から課せられた拘束があつたことは論ずるまでもないこととしてさておき、余す所のない敗戦に終った戦争というものの無残さ、恐ろしさがいかにも強烈であつたこと、犠牲を捧げ尽くして残つたものが、悲惨極まる敗戦の現実であつたこと、戦争という行為は所詮は空しいものという虚無感、諦念が、一億の民衆に滲透し切つたこと、未来への道はこの灰燼の無一物を踏まえて立ち上がる以外にないという覚悟の外になかつたこと、等々の内部的因子が大きくはたらいいたと思われる。戦前・戦中と呼ばれる時期に民衆が何を考へていたかというよりも、この時期に民衆がいかなる現実を見て来たかということの方が、戦後の転廻を理解する上には肝腎・重

要である。昭和史に於ける日本は、避けたいという願ひはあつても急坂を転げ落ち始めた岩石のように、遂にとどめ得なかつた宿命的な経過をたどつたと思われる。この昭和史の日本に關して、転換期という時期を考えるとすれば、昭和二十年代というような局限された期間だけを觀察しても十分ではなく、敗戦に至るまでの、戦前を含めての、敢えて言えば何時からという上限を定めたい長い期間に、いかなる現実を体験し、いかなる現実を直視して来たかが、考察対象になつて来ると思う。たとえば、私自身の体験を省みるならば、当時極めて貧困であつた（今はそうではない）農村に生を享け、働いても働いてもすこしも樂になる希望の持てない、自ら耕して作つた米穀さえ自分の口に入らないほどの条理の通らない小作農がむしろ多数を占めていた現実に対して暗澹たる感情を持たされた戦前の実情を知っているから、終戦後に実施された農地改革の如きが、多少の無理押しは避けがたい力の施策であつたにしては、摩擦抵抗が不思議なほど少なく実現した事もわかる。旧地主対旧作人の間に感情的こだわりなどは全くなく、自由と平等と和氣と活氣とは、何の支障も葛藤もなしに克ち得られたと思われた。農村（私の郷土の）は、昔に比べて著しく豊かになつた。戦中・戦後の国民生活の無残な荒廃の中で、農村は自らの手で耕し作る者の強みを知つた。一時的な事態ではあつたが、都会と農村との置かれていた位置が、優位と劣位と逆転してしまつたことを体験的に確認した。農村が都会に対して本来平等であるべきことも身を以て知つた。戦後には積極的に農村の生活の向上を主張して行つた。私が自分の生ま

れ育つた阿蘇の山奥なる久木野村に時たまに帰省して見ると、年とともに道路は良くなり、文化施設は充実し、各戸の生活様式は改善されて行く。私などは都会の一隅で依然としてみみっちい生活をしているのだから、昔の都会と田舎といった先入主で考えていたら大間違いである。

私はさきに「柴屋軒宗長の文学」という拙文をものにして、田舎生まれの連歌師が、その八十余年の生涯を通して戦国乱世を生きた抜いた事実に興味を抱き、特に戦乱の間に明け暮れる田舎人の生活、農村の労働風景を、どのように眺め、どのように描いたかに触れて論じてみたことがある。現代に私たちがこの眼で見て、この心で感じた所と、宗長老人の文学の描く所が、はなはだ近いことを感じたのである。

転換する世代と一般的に言えば、何時の世代でも古い物が去って新しい物が入れ替わるのは、むしろ常の進展の姿である。転換期と特に名を付けて呼ぶからには、そんな常住に見られる新陳代謝をさす名称ではあり得ない。旧時代の秩序が全面的に崩壊し、旧時代の価値観が急激に否定され、それに替わる新しい価値観、新しい秩序が、徐々に頭をもたげて来るという過程が、必然的に進行する。室町期の半ば過ぎた頃からの日本はまさにそんな時代だったと思われるし、現代史における、いわゆる戦前・戦中・戦後に相わたる混乱の世紀も、まさにそんな時代であったと思う。

時代が大きく転廻する時、歴史的に見て最も重要な意味を持つ事からは、価値観・価値認識が大きく転廻するということである。鴨

長明の『方丈記』、兼好法師の『徒然草』は、小異を捨てて大同を取って評するならば、ひとしく無常観の文学であり、否定観の文学である。人生の常なき事は、条理としてならば何人もこれを納得しない人はない。そのような知的な納得を無常観と名づけるのではあるまい。深刻な現実体験に当面して、あらためて人の世の常なきを痛感し、福も禄も寿もやがては去ってゆくもの、究極に頼みとする価値は無きものぞ、というあきらめ、諦念に到って、始めるこれを無常観と呼ぶにふさわしいであろう。幸福こそが人生のすべてとする執着を否定しようとするものであるが故に、こうした物の考え方を、否定観と位置づけをしてみる。ただし、人の世の無常さ・はかなさを嘆き悲しむのは、人情の常である。そこに人生の自然があり、現実がある。そこから生まれた抒情文学は、無常の感の上に成り立っている。無常観の文学と無常感の文学と、まぎらわしくないこともない。小林智昭氏の『無常感の文学』という論考があつていろいろ考えさせられる。名前の意味する所として、「無常観の文学」と「無常感の文学」とでは、同義ではあり得ない。無常を観ずることから出発しても、諸行無常を観ずる点に究極の主題が置かれていれば、「無常観の文学」であるが、生者必滅・盛者必衰のことであり、観念として受け留めても、人の世の常無き、はかなさに当面しては、嘆き悲しむのが人情の自然である。そうした人間の自然を語ろうと欲する時、無常は世の常の姿なればと超然として解説することが出来るものではない。

『平家物語』を例に取って見れば、物語全編を統一する主題とな

っているものが諸行無常の観念で、無常を観することによって欣求浄土の心を発起せしめんとするものであることは、構成の上でも実証されるから、これを無常観の文学と見なして誤りはない。これと矛盾する所なく、『平家物語』は、軍記物語というジャンルの作品の中でも抒情性の卓越した作品である。この点を捉えて言えば、『無常感の文学』であるにちがひなからう。無常を観するには、まず無常を身に沁みて感じなければならぬ。涙を流し尽くさなければ、一念発起して浄土を欣求するに到ることはあり得ない。『平家物語』などの場合は、無常観の文学即無常感の文学となつていゝと言えよう。

『方丈記』は、詠嘆的・情緒的と評される面は確かにあるが、右に触れた『平家物語』に見られるような、人の世の無情さ、はかなさに涙を流すものとは方向を異にしている。無常の様相をしかと観じて、昨日までの己れの中にあった名利の念を振り捨て、世の中を遁がれ切った草庵生活の楽しさを述べたものである。世間的な名聞利欲の世界を遁がれ得た境地を悦びとし、草庵生活の日々に、歌人として王朝の唯美主義の中に己れを清うしようとしているもの、作品の主調をなしているのは、名利の世界の否定である。王朝後期の源信僧都や増賀上人らの思想や行動に強く影響されている。

思うに王朝後期から鎌倉期・室町期を通じて、何かについて安定を欠いた時代であり、思想の動揺が甚だしかつたと思う。どの時代を取って見ても、時代思潮の一隅には、思想の大きな転換を望む動きが見られ、つないで見ると、それが一つの流れをなしていて、系

譜を描いてみる事が出来る。

私はさきに拙著『探究日本文学中古中世編』を執筆した際、旧稿「柴屋軒宗長の文学」（大阪樟蔭女子大学論集第11号）と「柴屋軒宗長の文学（続）」（松風学会誌第三号）とをまとめて改稿した中で、宗長と兼好とを比較して、兼好は所詮は都びとであり、彼の現実主義には彼が都びとであるが故の限界があり、京を一步外に出たら、彼の人間評価は極めて狭い枠の中に閉じこもらざるを得なかつたことに言及した。政治の形態なり、外的な生活の様相なりは、覇権を掌握した者の力で定まるが、内面的な思想、なかならず現実観・価値観等はなかなか転換しがたいものである。私は兼好と宗長との随想的散文を読み比べて、かなりに似ている所と、甚だ異なつた所のあるのを発見して、すこぶる面白いと思つた。まず、宗長についてこう書いた。

彼の随想の面白さは、彼の人間の面白さである。そして、一切の粉飾を去つた人間的な面白さを、まざまざと見せてくれるのは、彼の文体の清新さであろう。深刻な人生の現実相を、たじろがず直視するまなこの確かさ、田舎に生まれ育つたしかも駿河の鍛冶職人のせがれという出自から来た、堂上歌人になん根性の強さが、自由に率直に物の核心を衝く文体を創り出させたものである。文学的性格では『徒然草』に似ているが、その『徒然草』とは異質的な世界である事を感じさせる。（右の拙著、三八五頁）

宗長と兼好との対比については、こう書いた。

ら、そのために自己の心を痛める所はなかったが、宗長は自己を現実世界の外に置いていたのではなかった。参禅しているが、禅の覚悟を以って人生を論ずる事はしていない。無常觀を根底に据えて理法を説きあかそうともしていない。彼は連歌師であるが人生を觀るのに連歌師の眼を以てしようとした形跡はない。彼は草庵に隱栖する文学者ではあったが、彼の人生觀は隱者的ではない。隱者がおおむねそうであるように高踏的でもなかったし、独りその身を善くして濁りの外に退こうとする底の独善者でもなかった。堂上の世界にも、武士の世界にも、庶民の世界にも出入し、時代とともに動き、考えていたと見受けられる。そのあたりに、一休和尚に参禅してその薰陶を受けた事からの影響もあったであろうと思わせるものがある。(三八七―三八八頁)

そして兼好について、次のような評言を加えてみた。

私は兼好法師の世界にも一種の現実主義を認めるのであるが、宗長の中にある現実主義との間には、いろいろの意味での距離を感じさせるものがある。兼好が問題にしたのは、要するに個人の心の持ち方に関するものである。何よりも彼の価値觀は基本的には貴族的情念の上に成り立っている。同時に京都的であり、京都本位である。「片田舎よりさし出でたる人」は所註「よき人」ではあり得ない。いなかびたものは、兼好の嫌惡を誘い、輕侮の感情を呼ぶものでしかない。だから過去の良き時代をなつかしみ、王朝の典雅にあこがれるのである。人間本然の自然と自由を愛する精神があつて、ルネッサンスに似た思想を、兼好は確かに抱いてい

と思うが、彼の美的趣味は飽くまで王朝のみやびの域内にあつて、そこから出ようとはしていない。(三八八頁)

兼好の時代も、日本歴史が大きく動こうとしていた時であり、宗長の時代は更に切迫した時代であつた。程度の差はあるが、日本歴史の転換期に生きた文化人であつた点は同様であるが、また、いろいろな意味で、現実觀・価値觀を修正し切換えざるを得ないような生活体験を持ったろう点も同様であるが、宗長の時代はまさに戦国乱世であり、京洛を中心とした古代の体制が完全に崩壊し去ろうとしており、もはや昨日までの文学者としての唯美的趣味の世界に安住して隱者然と振舞うことは許されなくなつていた。そして同時に昨日までと全く違つた新しい世界、新しい体制が既に予見される兆候も見え始めていた。そこに兼好の時代と同時代のものとして並べては論評することを許さないものがある。

『徒然草』に見る兼好の思想は極めてユニークなものである。常無きが世の常、嘆くべきでなく、悲しむべきでないというのが、彼の人生觀・現実觀の基底となつてゐる。『方丈記』に見られる詠嘆調が、彼に於いては消え去つてゐる。王朝後期の増賀上人伝に見られるような突つ張り、力みも彼には見られなくなつてゐる。兼好の人生に対する態度は、すこぶる淡泊なもので、言うならば傍觀者のなものである。彼の文章は主として批評的な内容を示し、彼の胸中の情念を訴えるような抒情的な調子はほとんど見られない。隱者文学・草庵文学の基本的なスタイルを創始したとも評されよう。この傍觀的・批評家的という方向は、宗長にも基本的には共通している

と思うが、第一に時代の差が大きいし、個性的な性格の面からも兼好と宗長では著しく離れている。時代の差という点では、兼好がもし宗長と同時代に生きたと仮定したら、あまで高踏の独善的に王朝趣味の中にもり得なかつたであろう。「しもさまの人」と「よき人」を差別して、前者の素朴さを嫌悪することも、あまで潔癖ではあり得なかつたであろう。

兼好には明晰な思想があり、哲学がある。宗長は主義とか思想を立てて論議する人ではなかつたようである。彼の手記の中に人生論がないわけではないが、それは具体的な事件に就いての感想が主となつていて、彼の抱く思想から演繹したようなものはない。兼好の如く無常観・否定観を軸として物事を考える所もなく、彼の世俗に對する姿勢は、連歌師的ではない。水の低きに流れる如く自然で平懷である。

このように眺めて来ると、時代というものが兼好を生み、宗長を生んだのであり、彼等はそれぞれ転換期を生活した文学者であつたのだと思われて来る。

その兼好は増賀上人の伝へむしろる伝説というべきかも、から影響を受けているふしが見られるし、その増賀と兼好とをつなぐ線上には、長明の『発心集』が介在しているらしいし、考えようでは、古代から近代へ向かつての雪崩れとも見られる小きぎみな時代転換の胎動を彼等の中に認めることが出来よう。

現代のわれわれが、現代の中に中世を見、中世の中に現代を感じるのは、中世びとたちが同じく困難で深刻な時代を生きていたこと

に触れ得た時である。以下、若干の項を立てて管見を記そうとする。これはその序章であり、端緒である。増賀と長明と兼好と、さらに兼好と宗長とをつないで考えて、私見を述べたい。それは単行の著述として予定しているが、いつ完成し得るか、甚だ心もとない。

(本学名誉教授)